

大学時報

No.366

2016

1

隔月刊

UNIVERSITY CURRENT REVIEW



気軽に楽しく外国語に触れることができる、国際色豊かなキャンパス（西南学院大学）

特集 それぞれの大学・立場から考える 〝大学におけるキャリア教育（支援）〟とは

座談会 初年次教育の今

小特集 留学生へのメンタル／フィジカルな支援をどう行うか

明日への試み 関東学院大学

わが大学史の一場面 日本大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 梅花女子大学／國學院大學／聖学院大学

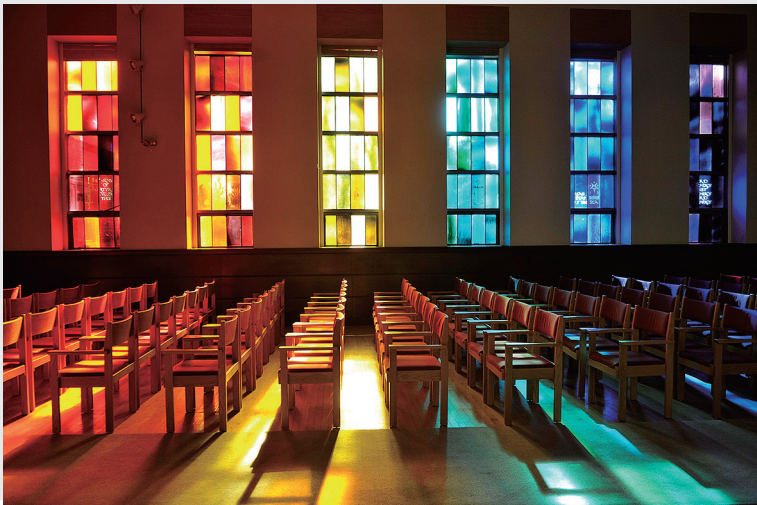
クローズアップ・インタビュー 小説家 三上 延さん

日本私立大学連盟

Thesaurus Universitatis



緑豊かな環境の中でゆとりのある
学生生活を満喫できる昭和ポストン

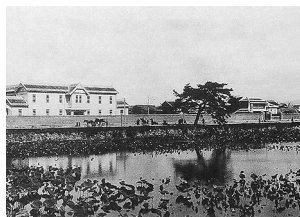


色とりどりの光が空間を満たすレインボーホール



西南学院大学

西南学院は2016年、
創立100周年を迎えます。



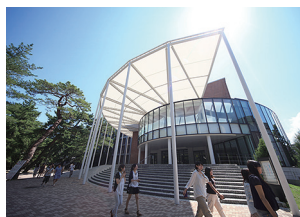
1916年
「私立西南学院」創立



1921年
大学の前身、高等学部を設置



1949年
「西南学院大学(新制)」開設



2008年
新・チャペル完成



2012年
新・言語教育センター完成



2017年4月
新・図書館利用開始予定

西南学院は、1916（大正5）年、米国南部バプテスト派の宣教師 C.K. ドージャーによって福岡市に設立されました。創立者ドージャーの遺訓 “Seinan, Be True to Christ”（西南よ、キリストに忠実なれ）は建学の精神として大切に受け継がれ、今では保育所、幼稚園、小学校、中学校・高等学校、大学・大学院あわせて約1万人が学ぶ総合学園へと発展しました。

1949（昭和24）年に開学した西南学院大学は、現在、7学部13学科、大学院8研究科を擁する人文社会系総合大学として、約8,000人の学生が学んでいます。

西南学院は、次の100年に向けて、一人ひとりの学生を大切に、福岡から全国へ、世界へ、はばたく人の育成に力を注ぎます。

国際交流



本学は1971（昭和46）年に国際交流計画を策定し、アメリカ・テキサス州のベイラー大学をはじめ、現在までに19カ国54大学と協定を結んでいます。

これまでに各協定校と交換した留学生の数は、派遣約1,200名、受け入れ約1,000名にのぼります。様々な国、幅広い分野で活躍する卒業生のネットワークも、本学の国際交流制度の魅力の一つです。

また、語学研修も盛んで、春と夏に実施される短期語学研修には、毎年250名の学生が参加しており、その他の海外研修や私費留学を含めて約500名の学生が海外留学を経験しています。

ボランティア活動



注) 写真は全て「海外ボランティア・ワークキャンプ」の活動です。

西南学院大学では、2003年度から毎年、国際飢餓対策機構の協力のもと、フィリピンの貧困地域へ学生や教職員を派遣する「海外ボランティア・ワークキャンプ」を実施しています。これまでに、188名の学生・教職員が現地で活動してきました。現地では、小学校訪問、貧困地域での奉仕活動、子ども会や地元の人たちと交流を行っています。

その他のボランティア活動も活発で、2011年度からはじまった東日本大震災ボランティアには、現地への派遣62回、学生・教職員の参加者は延べ512名を数えます。

地域交流

西南学院大学は、国際交流や海外・国内のボランティアのほか、地域とのつながりも大切にしています。



● 西南コミュニティーセンター

大学と地域の交流拠点として、2007年4月にオープンしました。館内には、コンサートや講演会などが開催できるホール、音楽練習もできる控室、茶室、多目的室、会議室などがあり、一般にも貸し出しています。



● 西南子どもプラザ

福岡市の委託を受けて本学が運営している、子育て支援施設です。遊び場だけでなく、ランチルームや授乳コーナー、中庭なども設置されており、乳幼児とその保護者が自由に訪問して遊ぶことができます。本学の学生も、ボランティアとして参加しています。



● 西南コミュニティークリスマス

地域の皆さまと祝う、西南学院のクリスマスです。クリスマスメッセージのほか、ゴスペルアクトーズの人形劇などで、市民の皆さまと共にクリスマスを祝います。

大学時報

No.366

2016.1



一世紀前に与えられた

使命

カレン・ジュン・シヤフナー ● 西南学院大学学長

西南学院は1916年に設立され、今年、創立100周年を迎える。創立者は、学院の使命を「良い世界市民になる人を育てる」や「青少年に対していかに奉仕するか教える」という言葉で表現した。この使命を基に、大学は1949年に「世界貢献のビジョンを持つ人を育てる」ために開設された。1971年に米国の大学と国際交流を開始し、その後、21世紀に向けて「Impacting the World」というテーマを掲げ、現在19カ国の54の大学と協定を結び、創立時の願いを実現しようと努めている。

変化の時代こそ長期的視野で大学教育を

清家 篤 ● 本連盟会長、慶應義塾長

2016年の年頭にあたり、日本私立大学連盟加盟大学のますますの発展と、関係の皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。

さて、今日私たちは大きな変化の時代を生きています。それは地球温暖化、人口の少子高齢化、情報通信技術の飛躍的進歩、そしてグローバル競争の激化といった、私たちの住む地球社会のあり様そのものを変えてしまうような変化です。そうした大きな変化に、大学社会も対応を迫られています。またそのような大きな変化のもたらす問題の解決に貢献すべく、大学も努力していかねばなりません。

同時に、そうした変化の時代であればあるほど、目先の変化に追われることなく、長期的な視野でものを考えることも重要になります。この視点を、人材に関してあてはめると、いわゆる即戦力という考え方はあまり意味の無いものになってくるでしょう。急速に進む大きな変化の時代には、今日の即戦力は明日には陳腐化した能力の持ち主となってしまふからです。

労働経済学は、個人の仕事能力が、その仕事をする上で必要とされる技術と、仕事をする上で直面する市場の構造に決定的に依存することを明らかにしてきました。現在の技術や市場構造にマッチした知識や技能は、新しい技術や市場構造のもとでも有用であるとは限りません。個人は技術や市場構造の変化に合わせて仕事能力を高めていかねばならず、それは大きな変化の時代になればなるほど大切になってきます。

実は、これまでも個人は技術や市場の変化に応じてその仕事能力を、主に職場において仕事をしながら高

めてきました。職場における能力開発の重要性は、ますます大きくなってきています。

そうした時代に大学に求められるのは、どんなに技術や市場が変化しても、その変化に対応できる基盤的な能力を学生が身に付けられるようにすることです。それは、新しい状況を自ら理解し、その理解に基づいて問題を解決するということ、つまり自分の頭でものを考える力です。そして自分の頭で考えるとは、考えるべき問題を見つけ、その問題を論理的に説明し、その説明が正しいかどうかを確かめて結論を導くというプロセスであり、これは学問の方法論に他なりません。

つまり、今日のような変化の時代には、学問を通じて自分の頭で考える力を身に付けるという大学の持つ最も大学らしい機能が、改めて重要になるのです。もちろん、大学で教授されるものは最新の学術成果や技術でなければなりません、その内容自体はすぐに古いものになっていくということも忘れてはなりません。大切なのは、それらを学ぶことによって自分の頭で考える力を磨くということなのです。大学において幅広く学問を学ぶ、奥深く研究をする、さらに課外活動などで課題を解決するというような経験を通じて、自分の頭で考える力は培われます。

大学でしっかりと学問をすることで変化への対応力の基盤を身に付ける。そして、就職したら職場での経験や教育訓練を通じて変化に具体的に対応し、仕事能力に磨きをかけていく。その意味で、学生が在学中に就職先を決めて、卒業と同時に就職し、企業は採用した新人を手塩にかけて育てていくという学卒定期一括採用の仕組みは、社会的には若者の失業率を先進国随一の低さに抑え、大学で身に付けた基礎能力をもとに企業でしっかりと人材育成が行われるという日本社会の強味に大いに貢献してきました。

OECDの成人力調査で、日本はトップに評価されますが、それには日本の大学と企業の人材育成力も寄与しています。変化の時代こそ、長期的な視野に立って大学教育の質を高めねばと改めて思うところです。

大学論の周辺

松本 宣郎 ● 東北学院大学学長

1 あるシーン

最近好んで観ているBSテレビの刑事ドラマがある。舞台は1940年代のロンドン。さる巨大企業が国際的な犯罪に手を染めていることを女性秘書が察知して外部に通報しようとしたところを見つかり、高層ビルの窓から突き落とされる。彼女がビルの壁沿いに落下してゆくシーンを見て驚いた。この巨大企業の建物は、コンクリートむき出しの白亜のビル、私にとっては懐かしいロンドン大学の本部「シネイト・ハウス」だったのだ。秘書が頭から血を流して倒れている場所も映されたが、そこはかつて私が研究のために通っていた大学への通路だった。かのロンドン大学もテレビドラマに建物を提供する時代となったのかと、おかしくもなった。

日本のドラマでも本物の大学が撮影現場となる。赤門などすぐわかる大学は用いられず、実在の大学を背景に、「洛南医科大学」とか「東都城北大」とか、一見ありそうで、実は架空の大学の銘板が画面にアップで映される。見る人が見れば本当はどの大学かはすぐに分かるのであろうと思う。ちなみに、現在放映中のいわゆる「朝ドラ」は、日本女子大学の創設者がヒロインと聞く。ドラマ展開がそこに至れば、同大学の建物が使われるのであろうか、興味がわく。かつては宮城学院も東洋英和女学院もその卒業生がヒロインとなり、学校自体も登場したこと、を思い出す。そういえば大河ドラマでは同志社も、という具合である。

映画への露出度だけの話ではあるが、一つには大学という存在が社会においてそれなりにある種の評

価を受けて認識されている証拠だということである。

権威・畏敬という觀念が大学にはまとわりついてい
ると言つてよいであろう。もう一つは、大学の側が、
多分ある時期からテレビなどで舞台とされることを
広報的観点からも積極的に受け入れるようになった
ということである。事実、大学関係者の大きな会合
などでは、必ずその年話題のドラマに登場する大学
の関係者が周囲から声を掛けられて、いささか面は
ゆいような、時に得意そうな表情で応える場面によ
く出くわすのである。私が勤める大学の正門広場
は、建築後100年近く経ち、文化財指定を受けて
いる建物が3つ並んでいて、それなりに古さを感じ
させる雰囲気があるのだが、そのせいにか1969
年の大学紛争をテーマとした映画のロケに使用を打
診され、喜んで提供したのも、そのような下心から
だと言えなくもない。撮影当日は発煙筒や赤青の旗、
機動隊と「反帝学評」などのヘルメット学生に扮し
たエキストラたちもみ合う姿が見られた。

いささか妙な書き出しになった。「大学」について
の文章を依頼されたのだが、「学長ガバナンス」も
「教育の質的転換」「PBL」「ディーブアクティブ

ラーニング」など、どなたもよくすでに論じられて
いて、さほど勉強していない私に容喙の余地はない
ように思える。よろしければ、「大学と私」という風
なスタンスでつまみ食いのような大学論、否、大学
閑話におつきあい願いたい。

2 大学のたたずまい

東京大学は金沢前田家の江戸屋敷跡、東北大学は
伊達家青葉城二の丸、京都大学は西園寺候旧邸とい
う風に、日本の帝国大学は庶民の町にありながら隔
絶した権力者層の塀の中に建てられて始まった。私
が人生で初めて足を踏み入れた（正確に言うとその
宿舎ではあったが）のは故郷の国立大学（当時）、岡
山大学であった。当時同大学の教育学部附属中学校
生徒であった私を南勝一校長先生が自宅に招いてく
ださったのである。大学キャンパスに隣接した教職
員宿舎であった。南先生は、おそらく教育学部教授
で校長を兼任されていたのであろう。ともあれ、岡
山大学そのものは新制大学として第二次大戦後、旧
陸軍第一七師団跡地に旧建物を利用しつつ設立され
たのである。これもまた、一時的にせよ国家権力を

象徴する隔絶された立地に大学が置かれた例であり、少なくない例でもあろう。

そうではない立地の大学も、もちろん多く生まれ
た。世界の大学に関する私の知見は、そもそも訪れ
た国に地域的偏差という制約があるので、見てきた
ことだけを記す。話は飛ぶが、30年ほど前まで発行
されていた冊子に、御茶の水書房発行の『社会科学
の方法』という、いい内容の冊子があった。当時、
私が属していた東北大学のリベラルな社会科学系の
教授たち、すなわち世良晃志郎・樋口陽一・広中俊
雄・吉岡昭彦氏らを共同編集者に掲げて、識者の間
ではよく読まれていた（思えば、これら進歩派論客
の諸先達で今も健在なのは、今年安保法制廃棄に
ついて歯切れよく主張していた樋口氏だけで、あと
は皆故人となった）。その冊子の表紙裏返しにコラ
ムがあり、「世界の大学」というシリーズで写真付き
の紹介文が連載されていた。編集者の一人、私と同
じ西洋史学の吉岡氏から、私がイタリア出張する機
会に2つほど大学を取材してきてくれと頼まれた。
1979年のことと記憶する。シチリアの首邑パ
レルモの大学とナポリ大学を、訪問というのではな

く写真を撮り、キャンパスをのぞいたという程度に
見ては来た。もちろんナポリ大学の方が規模が大き
くレベルも高いので、建物の大きさや風格にも自ず
から差はあったのだが、共通して感じたのは、町の
通りに他のビルや店舗と並んで位置し、都市の生活
に溶け込んでいるということであった。建物に入る、
それも日本の多くの大学のように正門をくぐってと
いうのではなく、普通の道路の歩道からドアを押し
て入るといふ感じなのだ。しかし、ナポリ大学はさ
すがに中は18・19世紀そのまま、天井が高く薄暗い
歴史的存在ではある。ただ、都市から隔絶せず、町
中の一角にあるのである。

このたたずまいは、後に訪れたロンドン大学の、
先述した殺人事件現場ロケに使われたユニヴァーシ
ティキャンパスも同様である。地下鉄の駅から階段
を上って道路に出るとバブがあり、それが大学の建
物の一部であったりする。公園を前にして中規模の
教会がある。それもロンドン大学のチャペルの一つ
という具合である。余計なことだが、こういう大学
では学生の体育の授業はどこで行うのだろうかという
気になったほどである。

もつとも、英国でも地方都市ノッティンガムの大学へ、さるローマ史学者を訪問したことがあるが、この大学は正門があり、新しいビル群で構成される、日本の地方大学そのもののような立地とたたずまいであった。それは、先日訪問した韓国の2つの大学でも感じた印象である。

英国でも、おそらく定まったパターン化はできないのであろうが、「都市と一体型」キャンパスという色合いは、どうも日本よりも強いのではないかと思わざるを得ない。オックスフォードとケンブリッジの両大学は英国においても別格であろうが、それぞれに2つの町が大学そのものというありようはよく知られるところである。現在は大学の建物と関係のない市街地エリアが広がってはいるが、町が本来大学の学寮群として始まったのがこの二大学である以上、当然だろう。これはポロニーヤ、ハイデルベルクなどの欧州諸国の古典的の大学についても言えることだろうし、カンタベリーやモンサンミシエル、日本の門前町も似たような歴史によって現代の町と一体化したたたずまいを持つことの説明になると思われる。

日本の大学は19世紀後半になってようやく出現し、大半は国立大学として国家権力の政策的意図によってたたずまいを定められたから、城やら大名屋敷やらの広大な敷地をあてがわれることにならざるを得なかったし、戦後に生まれた大学も、それなりの広い土地を囲い込む門と塀とが必需と思ひ込まれたということではあるまいか。私立大学には、一部には庶民の町の一角の民家からスタートしたものもあつたろうが、多くはすでに定まっていた国立大学のたたずまいを継承した。「大学の権威」を持たなくてはならなかったからだ。

私が属するキリスト教学校について言うと、19世紀後半、欧米のミッシヨンによって建てられたものが多くを占める。建築家も欧米人で、キャンパス構想も建物も、日本の19世紀の町の中につくることになった。国立大学とはまた異なる、キリスト教のプレゼンスを印象付け、学生を確保するための美しさが追求されたが、それはしかし一種の権威主義の現れではあつた。だから、町並みの中の学校ではなく、門を入り、瀟洒な建物を仰ぐ、そのような学校となつたのだろうと思うのである。

それが過ちであったというのではない。ほとどの大学も60〜100年の歴史を経た現在、大学のたたくずまいは、隔絶的ではあれ町の中に安定したプレゼンスを主張している。老朽化した部分の取り替えや、新たな社会的ニーズに対応する手直しは当然のこととして、そのままのたたずまいを守ってゆくに如くはないのである。

とはいえ、新しい大学の設置は至難の業であるが、新キャンパスや新校舎の建設は行われる。それも、各大学競って急ピッチの観すらある。その流れの中では、これまで述べてきた「町の一角にある大学」が基本理念となっている。門や壁は設けない。建物は駅の近く。コンビニをテナントで入れ、カフェも、またしばしば聞く音楽などの学生、プロ問わないパフォーマンズもまた近隣住民に公開するというコンセプトである。学内の設備でも、「喫煙室」はない方がいいが、受動喫煙を避けるためにはまだ不可欠だし、自動ドア、パソコン設備、最近話題になっている「パウダールーム」なども、この大学の公開性・開放性推進のために避けられない。否応なく各大学が対応することである。

大学は白い巨塔ではないと言われて久しい。まだそんなことが、というのではなく、英国のオックスフォードタイプの大学、すなわち大学が町そのものであり、町と一緒にある大学が日本の大学の現在のトレンドというふうに考えるのが、私には多少心休まるところなのである。

3 大学改革に欠けているもの

2014年、私立大学をゆさぶったのが「学校教育法の改正」であった。学長ガバナンスの遂行を効率化ならしめるための規程を大学において整えるために、かなりの時間とエネルギーを費やし、寄附行為まで含めて多くの規程が改定された。具体的には、本学では全学教授会というものを廃止したから、実質的にこの法律改正の影響は大きいと感じられた。しかし、この改正の仕事は規程と制度上のことであるから、実際に学長が突然物事を独自に決めるようになったというものではなかった。たとえば学長選考の方法にしても、教員全員の投票による選出自体は認められなくなっても、その結果を法人は参酌するということで追認できるとしたから、従来と変更

はなく、実際にいくつかの大学で従来通りの方法で学長の選出が行われたと聞く。

むしろ、大学に実質的改革を急がせたのは「改革支援事業」、例の「タイプ1〜4」認定のための改革ポイント制であった。単に規程制定にとどまらず、会議録・表彰・評価表などのエビデンスが求められることから、全教員にも作業が求められることになった。しかもポイントがとれなければ補助金カットというペナルティがつくから、わかりやすいというか無理矢理効果を引きずり出すものだった。これはしばらくは毎年の仕事になりそうであるから、一層きついついということである。

そこに2015年の6月8日の「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」なる下村前文部科学大臣の通達である。もっぱら「第三 1 組織の見直し（1）」後段「教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、一八歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう」の部分を取りざたされ、国

立大学協会をはじめ多くの分野から一斉に反発が起こったのは周知の通りである。

これに対する文部科学省の弁明でも懸念は失われず、わが日本私立大学連盟インテリジェンスセンター政策研究部門会議の「提言」が、私学が重視する人文社会科学分野でのリベラルアーツ教育を擁護し、国立大学の識者たちは『IDE現代の高等教育』五七五号（2015年11月）で「文系の危機」というキャンペーンを行ったことについて、ここで論を重ねる必要はない。ただ、文部科学省というより首相の全体的な政策姿勢への懸念、不安、不快感は募るばかりである。「苛政は虎よりも猛し」である。私たちは私たちの意志を常に発信し続けなくてはならない。現下求められているかに見える大学改革への視点に欠けているものは、学生へのまなざしのみならず、大学教職員へのそれ、要するに「人間・人格・精神」を包摂する視野、思いやり、である。